

オスマンとローマ——近代バルカン史学史再考——

藤波 伸嘉

オスマン帝国は多民族多宗教国家である。従ってその思想史も、多民族多宗教的に記述される必要がある。ではそれは如何にすれば可能なのか。とりわけ、個々別々の民族主義の「覚醒」が主題となりがちであり、故に「トルコ思想史」「アラブ思想史」「ギリシア思想史」などといった枠組みが堅固な近代思想史の文脈において、こうした個別「民族史」の単純総和ではない形で「オスマン思想史」を描くにはどうすれば良いのか。

本稿ではこの問いに答えるべく、まずはオスマン人が共有した認識枠組みとして、近世以来のローマ理念の変遷を跡付けた。その上で、ギリシアの歴史家スタマトプロスの著作、『民族後のビザンツ—バルカン史学史における連続性の問題』を紹介しつつ、近代オスマン思想史への新たな視座を提起した。同書は、民族主義の浸透後、19世紀半ばから20世紀半ばにかけてのバルカン諸民族の歴史叙述や歴史認識におけるビザンツ表象を導きの糸として、それらが果たして如何なる広域的秩序像に枠付けられていたかを、一種のメタ秩序論として、民族・宗教横断的に考察する著作である。その際に重視されるのはタンズィマート改革後のオスマン帝国という共通の現世的文脈であり、具体的には、各「民族史」において歴史叙述の「正典」と見做される著作及び著作家を「変種」と目される著作及び著作家と比較した上で、その各組が、バルカン全体の史学史的な流れの中に如何に位置付けられるかを検討するという方法が選択される。そこで扱われる史家はギリシア人、ブルガリア人、ロシア人、セルビア人、アルバニア人、ルーマニア人、トルコ人と多岐に及ぶ。

本稿は最後に、思想面に留まらず、近代オスマンの社会経済における正教徒の卓越した地位にも注意を喚起した。正教徒を中心に、オスマン帝国の非ムスリム臣民は、帝国論・国際関係史・国際商業史・比較思想史などの文脈において、単にオスマン史のみならず、近代世界史全体の展開の中でも特筆すべき重要な役割を担っていたことを改めて指摘した。